

夏目漱石

艇長の遺書と中佐の詩

艇長の遺書と中佐の詩

昨日は佐久間艇長の遺書を評して名文と言った。艇長の遺書と前後して新聞紙上にあらわれた広瀬中佐の詩が、この遺書に比してはなはだ月並なのは前者の記憶のまだ鮮かなる吾人の脳裏に一種痛ましい対照を印した。

露骨に言えば中佐の詩は拙悪と言わんよりむしろ陳套を極めたものである。吾々が十六七のとき文天祥の正気の歌などにかぶれて、ひそかに慷慨家列伝に編入しても

らいたい希望で作ったものと同程度の出来栄できばえである。文字の素養がなくとも誠実な感情を有している以上は（またいかに高等な翫賞がんしょう家でもこの誠実な感情を離れて翫賞のできないのはむろんであるが）誰だれでも中佐があんな詩を作らずに黙へいそくって閉塞船で死んでくれたならと思うだろう。

まずいという点から見れば双方ともに下手まずいに違ちがない。けれども佐久間大尉のは已やむを得えずして拙まずくできたのである。呼吸が苦しくなる。部へ屋やが暗くなる。鼓膜こまくが破れそうになる。一行書くすら容易ではない。あれだけ文

字を連らねるのは超凡の努力を要するわけである。したがって書かなくては済まない、遺のこさなくては悪いと思うこと以外には一画いっかくといえども漫みだりに手を動かす余地がない。平安な時あらゆる人に絶えず付け纏まつわる自己広告の銜げんき気はほとんど意識のぼに上る権威を失っている。したがって艇長の声は最も苦しき声である。また最も拙せつな声である。いくら苦しくても拙でも言わねば済まぬ声だから、最も娑婆しゃば気を離れた邪じゃ気きのない声である。ほとんど自然と一致した私の少すくない声である。そこに吾人は艇長の動機に、人間としての極度の誠実心を吹き込んで、その一

言一句を真まことの影のごとく読みながら、今の世にわが欺あざむかれざるを難ありがた有く思うのである。そうしてその文の拙なれば拙なるだけ真の反射として意を安んずるのである。

そのうえ艇長の書いたことには嘘を吐つく必要のない事実が多い。艇が何度の角度で沈んだ、ガソリンが室内に充みちた、チェインが切れた、電燈が消えた。これ等らの現象に自己広告は平時といえども無益である。したがって彼は艇長としての報告を作らんがために、すべての苦悶くもんを忍んだので、他ひとによく思われるがために、いたずらな言句を連ねたのでないという結論に帰着する。またその報

告が実際当局者の参考になつた効果から見ても、彼は自分のために書き残したのでなくて他のために苦痛に堪えたという証拠さえ立つ。

広瀬中佐の詩に至つては毫ごうも以上の条件を具そなえていない。已やむを得ずして拙な詩を作つたという痕跡こんせきはなくつて、已を得るにもかゝらず俗な句を並べたという疑いがある。艇長は自分が書かねばならぬ事を書き残した。また自分でなければ書けないことを書き残した。中佐の詩に至つては作らないでも済むのに作つたものである。作らないでも済む時に詩を作る唯一の弁護は、詩を職業とす

るからか、または他人に真似まねのできない詩を作り得るか
らかの場合に限る（そのほか徒然つれづれであつたり、気が向い
たりして作る場合はむろんあるだろうが）。中佐は詩を
残す必要のない軍人である。しかもその詩は誰だれにでも作
れる個性のないものである。のみならず彼あのような詩を
作るものに限って決して壮烈の挙動をあえてし得ない、
すなわち単なる自己広告のために作る人が多そうに思わ
れるのである。その内容がいかにも偉そうだからである。
また偉がっているからである。幸いにして中佐はあの詩
に歌ったと事実のうえにおいて矛盾しない最後を遂とげ

た。そうして銅像まで建てられた。吾々は中佐の死を勇ましく思う。けれども同時にあの詩を俗悪で陳腐で生きた個人の面影おもかげがないと思う。あんな詩によって中佐を代表するのが気の毒だと思う。

道義的情操に関する言辞（詩歌感想しうかを含む）はその言辞を實現し得たるときはじめて他をしてその誠実を肯うけがわしむるのが常である。余に至っては、さらに懷疑の方向に一步を進めて、その言辞を實現し得たる時にすら、なおかつその誠実を残りなく認むるあたわざるを悲しむものである。微ほのかなる陥欠は言辞詩歌の奥ひそに潜むか、ま

たはそれを実現する行為の根に絡からんでいるかどっちかであらう。余は中佐のあえてせる旅順閉塞の行為に一点虚偽の疑いを挟はさまむを好まぬものである。だから好んで罪を中佐の詩に嫁かするのである。

(明治四三・七・二〇)

日本文学電子図書館

著 者 夏目漱石
制作者 宮澤一郎
底 本 「漱石全集 第7巻」角川書店
昭和42年 6月30日 6版発行

日本文学電子図書館